

[特別展によせて]

対馬の朝鮮仏をたずねて

「対馬は素朴な信仰の生きているところ。津々浦々に人々の信仰のあかしが垣間見られます。」

私は、奈良から日本の西北端・長崎県対馬へ、特別展の借用交渉に出るため、多くの先生方に相談をいたしました。先生方は口を揃えて、こう言われるのです。

対馬は福岡から船で4時間ほど北西へ進んだところであり、日本よりも朝鮮に近い島です。ここは今度の展覧に関しては、奈良から最も遠い地ですが、同時に、最も重要な地でもあります。三世紀から『魏書』の倭人伝に登場し、古来、中国・朝鮮への要路であったこの島には日本の中で最も多くの朝鮮仏が集まっています。今回の特別展「百済・新羅の金銅仏——飛鳥・白鳳仏の源流」ではその中から10点ほどをお借りしたいと考え、6月18日に、それらの借用のお願いに出かけました。

対馬は律令時代以来、北の上県郡(かみあがたぐん)、南の下県郡に分けられています。下県郡の東海岸にある厳原町厳原(いずはら)は、その時に始まり現在も続

銅造菩薩立像
法清寺蔵銅造如来立像
海神神社蔵

く島政の中心地です。厳原の万松院は島主宗(そう)氏の菩提寺として名が高く、ここに宗家二代目の重尚(〜1261)の念持仏であった高麗の観音像が伝えられています。中国宋代の木彫仏の影響が考えられる半跏の姿勢で、後補の台座底部に「重尚公…」の刻銘があります。宗家代々の墓を守る万松院の大切な守り本尊と言えます。

厳原町のK氏宅には同氏が念持仏とされる統一新羅の観音像、如来像、彫刻としては珍しい高麗の被帽地藏があり、太平寺の観音像は統一新羅の古様を示して、現在対馬の資料館に預けられています。厳原町は東海岸から西海岸に及ぶ広い地域ですが、西海岸近くに、三国時代の菩薩像を伝える法清寺があります。古代から中国・朝鮮への重要な交通路であった対馬は、遣新羅使、遣隋使、遣唐使などの立ち寄る場所でありました。K氏・太平寺・法清寺の菩薩像は、時代的には、遣新羅使がこの地に往来していた頃(7世紀〜8世紀)のものであり、9世紀初めに消滅する統一新羅・日本両国の修好がまだ

銅造観音菩薩半跏像
万松院蔵

続いてきた時代のものとして興味深く思われます。その頃のものとしては、ほかに、黒瀬の如来坐像(9世紀初)、海神神社の如来立像(8世紀)があります。

高麗の大ぶりの誕生仏を遺す大興寺も西海岸にあります。対馬の誕生仏としては、他に、上県郡になりますが、梅林寺、清玄寺のものがあり、前者は統一新羅、後者は高麗です。これらの釈迦誕生仏は、いずれも本尊の近くに安置されており、4月(あるいは5月)8日の花祭に現在も用いられているのです。

美津島町黒瀬は、入り組んだ湾に西面しています。ここは下県郡の最も北寄りのところで、人々は素朴な半農半漁の生活を営んでいます。ここで安産の女神様(おんながみさま)として信仰されている重要文化財の如来坐像があります。現在お堂はなく、村の公民館の一隅に神棚を設け、男神(おとこがみ)とされる李朝の菩薩坐像と並置されているのです。女神様は毛糸の帽子に、派手な子供服、白いよだれかけを着せられ、隣の男神像も同様な処遇を受けています。棚の天板から下がった幕が神像の姿を少し隠し、前には鯉口(わにぐち)に見立てた大鈴、鈴には紅白の長い紐がついています。更に、瓔珞に似せた布製の飾りもの

銅造如来坐像
黒瀬観音堂蔵

が何本も下がっています。棚下には燭台にろうそく、線香立て。まことに、神仏混合の素朴な姿が展開されています。如来像は統一新羅の典型的な美形であり、丸顔に三日月を描く眉と切れ長の目、愛らしい口元を見ていると、本当に、人々がこの像を女神様と信ずるのもうなづかれます。

下県と上県をつなぐ万閑橋を渡って北の上県郡に入ると、豊玉村の西海岸寄りに小綱の観音寺があります。下県の大興寺もそうでしたが、西海岸には良港が多く、海流や風向きなどの条件から、対馬の中でも朝鮮半島に向って開かれた地域です。観音寺は無住の小さなお寺ですが、御本尊は由来の確かな高麗の菩薩坐像で、胎内納入品の結縁文から、朝鮮・浮石寺の僧たちが1330年に発願して作ったものであることが分かります。この像は現在、壇家の人々によって守られています。

峰村山坂の海神神社も西の湾に面し、海神(わだつみ)との関係が深いことが分かります。近くに海彦・山彦伝説の和多都美(わだつみ)神社が、やはり海に面してあります。海神神社は対馬の一の宮で、古来、宝物が多かったのですが大かた失われ、重要文化財の如来立像は、わずかに幼さを残していますが黒瀬の如来像とお顔がよく似ており、お顔の大きさも近いのです。衣裳の形は両者が異なりますが、これだけ作風の近いものが同じ対馬に残っているのは、偶然とは思えません。この像は神仏分離令の発布される以前、江戸時代に御神体として拝まれていた記録があります。ここに御神体とされていた仏像があり、黒瀬には、今でも女神としてあがめられる如来像がありました。神も仏も同じと見る心がここにはまだあるのです。

「居る所絶島。方四百余里ばかり。土地は山険しく、深林多く、道路は禽鹿の径のごとし、千余戸あり、良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糶(してき)す。」と『魏書』が記す三世紀頃の対馬のこうした様子は、人々の心とともに、今も余りかわらぬようにさえ思われるのです。

(村田靖子)